

自民党総裁選～衆議院選挙を顧みて

陰で動いた怪しい力（自民党総裁選）

| 1

“聴き飽きた常用句”ばかりが目立つ所信表明演説

石破茂自民党“総裁”は、“総裁”としての仕事を何もなされないうちに衆参本会議(10月4日)で所信表明演説を行って内閣“総理”大臣としてデビューしましたね。このような場合に演説の原稿を作るのは内閣府のお役人なのではないでしょうか。石破さんも読み方を精一杯練習したせいか、まずは無難なデビューぶりだったように思えます。しかし、内容はどうかというと大問題。随所に「長引くデフレからの脱却」やら「失われた30年間」といった“聴き飽きた常用句”が並んでいるからです。こんなに長引くデフレというものがあるのでしょうか。経済界には供給制限の策を施してデフレ状態から抜け出すといった浄化作用が備わっているというのに。「失われた30年間」も「日本が経済成長率世界第一の座を失ってから30年」ということであってこの30年間に継続して失われているものはないのです。

9人の総裁選出馬者のみんなが秀才顔をして“いいとこどり”した議論をして

自民党“総裁”選挙の際に9名もの候補者が、“総理”選挙でもあるかのごとくに街頭に立って、“総裁”選挙投票資格のない市民に向かって“施政方針演説”をしていましたね。そしてその“どいつもこいつも”が並べ立てて口にしていたのがこの“聴き飽きた常用句”でした。私は総裁選に立候補した大蔵・財務官僚上がりの小林鷹之氏が東大法学部卒と知って「ははあ、そうか！」と思いましたよ。私たちが学生だった頃には、私たち安保デモ参加の仲間が日本の将来を自ら考えて行動していたのに対して、卒業後お役人になった学生たちが総じてノンポリで、小林鷹之氏と同じような秀才顔をしてもらえばキャンパス内で幅を利かせていたものです。驚いたことに、時代が移った現代では、自民党の議員さんたちが、学問の代わりに“聴きなれた用句”を並べ立てて、秀才顔をして演説するようになっていたんですね。しかし、自ら考えたものでなく既成の常用句を“いいとこどり”した議論だけに筋道が通った訴求ができておらず少しも心に響くところがありません。

爆笑問題”太田総理”の心に届く議論に学んでほしかったのに

その昔石破さんは、漫才コンビ爆笑問題の二人が起用されて日本テレビで放送されていたバラエティ番組『太田光の私が総理大臣になったら』にゲスト出演したことがあります。多分石破さんは「次期首相と称されている私が人気番組に出演してひとくさり政治談議を聴かせてやろう」といった魂胆だったのですが、逆に“太田総理”が述べた「政治家に経済が動かせるわけがない」という議論に石破茂氏さんは反論できず苦笑いをしていただけでした。太田総理の言や良し。経済は強大な下部構造であって、上部構造である政治が大きく動かせるものではありません。太田光さんは、共著の形ですが「憲法九条を世界遺産に」(集英社新書)を刊行され”発想が面白くて筋の通った見解“を披露されています。「爆笑問題の漫才が爆笑を呼んでいるのもその言が聴く人の胸に届くからなんだろうなあ」と思っているのですが、総裁選での9人の候補者の言からは、これぞと思える政策議論は一言も聴きとることができませんでした。「自民党はよくもこのような薄っぺらな政策議論だけで長年与党の座を張ってこられたものだ！」と逆に感動(?)するとともに「こんな状態でいて、自民党議員各位は政治家としての実力を身に着けていけるのだろ

うか」と心配にさえなりました。

非二世三世系の初代女性総裁兼総理の夢も

現在は自民党の最高顧問に収まっている麻生太郎氏も、高祖父が内閣制度発足前の日本国政府(太政官)の実質的に初の内閣総理大臣と言われる大久保利通、祖父が戦後の日本の基礎を作り上げたといわれる吉田茂元首相という二世三世議員の代表のような方です。この麻生氏が、自民党総裁選に当たって二世三世でも何でもない高市早苗女史に肩入れしていたようですね。これが功を奏したのかどうか、高市早苗女史の得票数が、ともに二世三世系の石破茂氏と小泉進次郎氏の上を行って 1 位となりました。「自民党員の中にもようやく二世三世議員主導體制を反省する機運が高まってきたのか」と少々喜ばしく思っていたのですが、これは私の甘い読み違いに過ぎなかったということを知らされてしまいました。

陰に二世三世系のキングメーカーの暗躍ぶりが見える

次表は自民党総裁選での石破茂、高市早苗ご両名の得票状を示した表です。高市早苗は 181 票の投票を得て、2 位の石破茂を 27 票上回って首位を占めたのですが、過半数に達しなかったため石破茂との決選投票に臨んだのでしたね。自民党「国会議員票」と同じ 368 票あった自民「党員票」が、決選投票では僅か 47 票の「都道府県連票」に変わってしまっているのが妙だと思うのですが、ここでも僅かながら石破茂が高市早苗を 6 票上回っていることになります。しかし、なんとといっても大きかったのが、石破茂が「国会議員票」で 111 票増の高市早苗を大きく上回る 143 増の投票を得たことでした。9 人の総裁候補が連立していた時の高市 60:石破 40 の関係が、他の7人の候補者を支持していた自民党国会議員が高市 40:石破 60 の投票をしたことによって逆転してしまったのです。麻生最高顧問とキングメーカーぶりを競う二世三世系の有力者の誰かさんが必死になって高市早苗下ろしのために他の7人の候補者を支持していた自民党国会議員に顔をきかせて動き回っている姿が見えるような気がしました。

	第 1 回投票			決戦投票			増加得票数		
	国会議員	党員票	合計	国会議員	都道府県連	合計	国会議員	都道府県連票	合計
高市	72	109	181	173	21	194	101	-88	13
石破	46	108	154	189	26	215	143	-82	61

それでもなお自民党の首位動かず (衆議院議員総選挙)

「自民党は張子の虎だったんだ」と思わせる投票日前々日の緊急広告

石破総裁は自党の刷新ぶりが国民の支持を得ていると勘違いされていたようで、短兵急に議会を解散し衆議院選挙を行うという拳に出ました。しかし、投票日の前々日(10/25)の日経紙に以下のような 1/4 段組みの政党広告が掲載されていました。「政治は国民のもの自民党」と「経済をさらに発展させ皆さんの所得を上げる。」という“聴き飽きた常用句”風のメッセージを掲げ、「万全の防災、外交・安全保障、充実した子育て・教育支援を実現。そして、中小企業・農林水産業をさらなる成長企業に。」といったこれも“聴

き飽きた常用句”を列挙して自民党の政策を精一杯アピールしているように見えます。多分、「自民党過半数確保危うし」と予測するマスメディア報道が相次いだために慌ててこの広告を掲載したのでしょうか、この広告を見て自民党議員に一票投じた人は一人もいなかったんじゃないのかなあ。選挙に当たって立憲民主党代表の野田佳彦氏がいみじくも「自民党議員は、政治ヤミ資金づけと二世三世の世襲議員ばかり」という旨表明されていましたが、業界団体や地元有力企業家から自民党議員に贈られてきた企業・団体献金が回りまわって自民党本部の懐に入っていたからこそ自民党は「張り子のトラ」然とした姿を保ち続けることができたんでしょうね。



“総裁”が自党の“総理”の管理ぶりを評価してもらうための選挙だったのか

そして、そんな総選挙の結果は 10/28 の日経紙夕刊に「自民過半数割れ 15 年ぶり」という見出しのもとに大きく報道されていました。自民 191 議席(改選前は 247 議席)公明 24 議席(改選前は 32 議席)の計 215 議席ですから改選前の計 279 議席から過半数の 233 議席を割り込んでしまったのですから「自民大敗」と大見出しの中で表現されても仕方のないところですが、石破“総理”は、「政治とカネの問題についての対応が国民にご理解いただけなかった」と、暗い顔をさらに暗くした情けない表情で弁明していましたが、それはそうでしょうよ、自民党“総裁”選挙の場面でも一人も党の肅清の実績や方向に触れていなかったではありませんか。そもそも、自民党の問題は“総裁”が管轄し、国会では必要に応じて“総理”が“総裁”(自民党の場合は石破総裁即石破総理ですが)の出席を要請して喚問すれば済むことです。

どうして日本国民はなおも自民党に対して愛着を覚えているのだろう

しかし、自民党の議席数 191 はなおも、改選前の 98 議席から 50 議席伸ばして 148 議席となった 2 位立憲民主党のはるか上を行く断トツものですね。どうして、日本国民は自民党に対して愛着を示しているのでしょうか。政治資金収支報告書に収入を記載していなかった自民党の前議員 10 人が、党から公認されず無所属で立候補していましたが、この自民党から公認されなかった候補者が代表を務める政党支部にまで、自民党本部が選挙の公示後に 2000 万円を支給していたと報じられていたではありませんか。相変わらず潤沢な政治資金が投じられていて、それが自民党支持の有権者の懐にまでとどいていたのかなあ、まさかね。きっと、二世三世議員に対して、「父祖の代からいつもお世話になってきた地元の政治家先生には選挙の時くらいは投票して恩返しなくちゃ」というところからきた結果だと思うのですが。

自民党の“歴史的な大敗”を防いだ二世三世系議員の存在

「石破」という名字の推定人口数は僅か 400 人そこそこで、国内の名字の中で 14857 番目という非常に珍

しい激レア名字の一つとされているようです。しかし、石破茂総裁兼総理殿も、レッキとした自民党の中の多数民族である二世三世系議員の一人で、鳥取県知事や自治大臣を務めた石破二郎氏のご長男だったんだそうですね。石破茂さんも、慶応大学を卒業後、三井銀行に入って一般の日本人と同様に“まじめに”勤めていたのですが、田中角栄元総理大臣の勧めで政治の世界に入ったのだそうですね。こんな風に、自民党内の有力者たちが勧誘してきたために、「自民党議員は、二世三世の世襲議員ばかり」という状態になったんでしょうね。そして、二世三世の世襲議員が、それぞれの公職選挙の当選に必要な選挙の三バン、つまり地盤(組織力)、看板(知名度)、カバン(資金力)をフル動員して議席を守ったからこそ、今回の衆議院選挙で自民党が“歴史的な大敗”を喫することがなくて済んだのでしょう。

4

「自民党」の実態は「地民党」？

二世三世議員に限らず、衆議院選挙では国政選挙なのに「この地域の経済伸長のために全力を尽くします」などと選挙演説をしていた自民党候補者が数多くいましたね。小選挙区制の発足とともに、二世三世議員をまねて「地盤をつくらなくちゃ」という思いをもって、地方の官庁に顔をきかせて、精々都道府県議員並みの“地政”を行って地元有力者の満足を得ている国会議員が増えてきたようですね。そして、この小選挙区制の導入の際には、自民党内の若手議員が結成した研究会に参加していた石破茂氏らが音頭をとっていたようですよ、どうせなら党名も実態に即して「地民党」に代えておけばよかったのに、

選挙制度から変えていかなくちゃ

小選挙区制とともに用いられているのが比例代表制ですが、諸兄は不具合な点や不都合さを感じられませんでしたか。国政に携わる議員を選ぶのですから、国民が支持する政党に投票するのは良いのですが、自民党の総裁選挙の際に9人の候補がまとまりのない政策を口にしてのを見て分るように、肝心の政党の政策が分からないのですから困ります。更に、投票場の立て看板には、立憲民主党も国民民主党それぞれの略称が同じく「民主党」と紹介されていましたね。「民主党」と書かれた投票は立憲民主党と国民民主党にどのように配分されたのでしょうか。国民民主党の比例区獲得議席数 17 が小選挙区獲得議席数 11 を上回っていただけに、「民主党」投票は立憲と国民に等分に加算されたのではないかなどと邪推してしまいました。また、小選挙区で敗北した候補者が「復活当選」する現象が繰り返されており、“ゾンビ復活”に対する疑問も少なくないようですね。

あまりにもお粗末すぎる日本の総理大臣選挙の過程

そして、どうみても「国民が選んだ」とは言えない国会議員が出そろったところで、最多議員数の自民党の総裁がそのまま内閣総理大臣になるのですから、国民が総理大臣を「我らが代表」と思いにくくなるというのも当然だと思います。同時に進められていたアメリカの大統領選挙では、共和党・民主党それぞれの出馬表明から始まって、予備選・党員集会、党全国大会を経て本選挙に至るまで約 1 年間で熱烈な討論会が実施されていて、トランプ、ハリス両候補による論戦も何度か行われていましたね。あれだけ、候補者の政見が一般国民の間で認知されていたのなら、たとえ自分が支持していない候補者が大統領になったとしても「国民に選ばれたのだから」と潔くあきらめることもできると思うのですが。日本の総理大臣選挙の過程はあまりにもお粗末すぎるような気がします。

日本人としての誇りをもって生涯を全うしたい

ノーベル平和賞受賞に対する社交辞令の祝意表明

そんな中で、日本被団協会(日本原水爆被害者団体協議会)にノーベル平和賞が授与されることになったというニュースが流れましたね。「核兵器が二度と使われてはならないことを目撃証拠を示し、核兵器のない世界を実現するための努力を続けてきたこと」が授賞理由でした。首相になってすぐにラオスに外遊していた石破首相は取材に答えて、「核兵器の廃絶に取り組んできた団体にノーベル平和賞が授与されて与えられることは極めて意義深い」と祝意を表明していましたが、これは単なる社交辞令に過ぎません。閣僚クラスの政治家が「日本はアメリカの核の傘で守られている」と公言し、日本国としても“核兵器のない世界を実現するための”核兵器禁止条約に参加していないのですから。「アメリカの核保有だけは OK」なんてヘンな理屈が罷り通っているんですね、日本の政界には。アメリカが史上唯一の核兵器使用国であり、日本がその被害国だということに。

安保闘争の当時の学生が考えていた日本の将来

私たちが学生時代に日米安保条約締結に対する反対運動に参加し時代に私たちが起点としていたのは、共産主義や社会主義といったイデオロギーの問題ではなく、「国際環境の中で日本はいかに行動すべきか」という問題だったと思います。アルバイトで忙しい日々でしたが、連日安保反対デモに参加する傍らで、学生同士真剣な表情で議論していたのを思い起こしています。なかでも、「どんな国も“我が国は悪なり”と思って戦いを仕掛ける国はいない。それぞれが“我が国は善なり”と考える国の間で起こるのが戦争である。問題解決の道は“喧嘩両成敗”しかない。そしてここにこそ、不戦を誓う平和憲法を擁する日本の世界平和実現に貢献する出番がある。」という想念を得たことを思い起こしています。しかし、一時は学生運動に対して同調するところがあったマスメディアも、どうしたわけか安保条約締結を機に論調を一転、自民党政府の「アメリカが日本を守ってくれる」という論調に染まってしまった感があります。はては、在日米軍駐留経費を日本側が負担する、いわゆる「思いやり予算」の編成までに至っているんですからねえ。「中国の軍備拡張によって日本を取り巻く東アジアの安全保障環境が厳しくなった」なんてでたらめな論調を吹き流してるんですから、岸田前首相が渡米した時のように国賓待遇もされるわけですよ。

アメリカは“国際警察”ではないのに

時が移った今や、ウクライナ問題を「共産主義国の独裁者の暴挙」というアメリカ論調でとらえ、アメリカのプロパガンダっぽい「ロシアのウクライナ侵攻に伴って極東に安全保障上の緊張が走った」という因果関係が全く不明の言舌を鵜呑みにした“聴き飽きた常用句”が、政界だけではなく一般市民にまでしみわたっているではありませんか。軍事オタクで元防衛庁長官の総裁兼総理殿以下自民党幹部の頭の中は「アメリカは“国際警察”の立場にある」という想念で凝り固まっているのではないのでしょうか。アメリカの二世大統領ジョージ・ブッシュが仕掛けたイラク戦争は、「イラクが核兵器を開発した」という偽りの情報に基づくものでした。これを受けた日本の二世総理大臣の小泉純一郎氏は真っ先にアメリカに同調して、サマーワに自衛隊を送り出していましたね。しかし、世界最大の核兵器保有国でありながら、イラクの核兵器開発という不実の異議を唱えて、イラク本土に爆弾の雨を降らせて、21 万人もの罪なきイラク民間人の命を奪った“とんでもない国際警察ぶり”をしでかしたのですが、自民党首脳には「アメリカのなすことすべてが善」という想念がいきわたっているせいかアメリカの不実を指弾する声は少しもきこえてきませんでしたね。平和憲法を擁して不戦を誓う日本が、国連を動かしてアメリカの動きを制すべき時だったのに。

今こそ平和憲法を擁し不戦を誓う日本の出番

いままた、アメリカのプロパガンダっぽい「ロシアのウクライナ侵攻に伴って極東に安全保障上の緊張が走った」という因果関係が全く不明の言舌を鵜呑みにして、アメリカの敵国をそのまま日本の敵国と見なして、膨大な防衛計画を練り上げ、更にその財源確保のための増税計画までたてています。そして、石破さんは「私が退任する前に日本の軍事行動を制約している憲法を改憲しておかなくちゃ」と心に決めているはずですが、北大西洋条約(NATO)諸国からの武器・弾薬の補給が絶えぬため、ロシア軍はむしろウクライナ側から押され気味で、最近ではウクライナ側からのモスクワ周辺攻撃が行われたという報もあったようです。すると今度は、ロシアから新型ミサイル発射で、どうにも戦闘終結の見通しが立たなくなっています。このままにしておくと、ロシアはウクライナに対して核兵器を使用せざるを得なくなりそうで、それを待っているのアメリカなのではないかと思えます。米軍当局はロシアに核兵器を使用させて、それに対する処罰としてロシアを核兵器によって殲滅させようとしているのではないのでしょうか。今こそ平和憲法を擁し不戦を誓う日本の出番だと思えます。アメリカとロシアの間に立って「喧嘩両成敗」を実施しなくては。

与野党政権交代の好機を逸して

しかし、衆議院選挙の後の首班指名の際は絶好の与野党政権交代の好機だったのですが、立憲民主党の野田代表が提案した野党結束が成就しなかったため、“以前と同じ”スタイルの政権が存続することになってしまいましたね。国民民主党代表の玉木雄一郎氏なんか、野田代表の絶好の機会をとらえた提案に対して、訳の分からない受け答えをして応じていただけでした。秀才顔をして戯言を述べ立てるところから「もしや」と思ったのですが、この玉木雄一郎氏がまた東大法学部の出身だったんですね。しかし、官僚出身の癖に野党で通してきたところを見ると、革新的な発想をお持ちなのかと思っていたのですが、最近では国民民主党が自民・公明両党と顔を並べて「年収 103 万円の壁」の法制化に乗り出してきたんですね。ことによると、玉木雄一郎氏は、自民党の落ちこみを、国民民主党の与党枠入りの好機として捉えていたのかもしれないですね。

市民グループの編成と拡大強化が鍵

今となっては次期衆議院選挙施行の時を待つしかありません。しかし先ずは、連携できる野党だけでも合併して野党を形成して結成することが大切です。名前は「大志党」で如何ですか。この名の下に会派を設けてお互いに議論を交わしながら、日本国民が誇りに思える“志”のこもった政策を立案していくのです。そして、その過程で、「大志党」の議員さんには、市民グループ編成・拡大強化に尽力していただくことが重要かと思えます。私たちが学生時代に日米安保条約反対運動に参加した時にあれほど熱心に討論していた学生グループや労働組合の皆さんの姿はあまり見かけなくなりましたが、あの時に日本人が持ち合わせていた気合は決して消え失せるものではないと思えます。市民グループの集会を重ねるに従って志豊かな人材が続々と党員の仲間入りをしてくるものと思われれます。市民グループの集会や市民デモが行われるときには老躯に鞭うって、志豊かに晩年の日々を過ごしていきたいと願っています。